

私の読書歴

一般教科 森岡 茂

記憶に残る最も古い読書体験は、ロビンソン漂流記のそれである。挿絵がすばらしかった。嵐の中、懸命に手押しポンプを操作する水夫の姿とか、無人の砂浜で、手製の傘をさしたロビンソン・クルーソーが人の足跡を発見する場面などが50年以上経た今でも頭に浮かんでくる。

小学校6年に上がる時、国鉄（今のJR四国）に勤務する父の転勤に伴い、松山の小学校から高松の小学校に転校した。引越しのごたごたの為か、担任の先生が饒別に下さったギリシャ・ローマ神話を、全部読み終わる前に無くしてしまったのがいつまでも心残りになっている。

子供の頃は、とにかく家の中で手に入る本を何でも読んだ。9歳上の長姉が買っていた「風と共に去りぬ」全6巻（だったかな？）とか、パール・バックの「大地」を読んだのは、確か5、6年の頃だ。5人きょうだいの末っ子なので、中学校卒業まで自分専用の部屋はなかった。5歳上の次兄が大学受験勉強に夜遅くまで励んでいた頃、その足元の布団の中で週刊朝日の連載小説を読んでいたら、「何を讀んどんや、バカ！」と叱られた。題名はすっかり忘れたが、昨年100歳で亡くなった丹羽文雄の恋愛小説だった（と思うが、舟橋聖一だったかな？）。

高校生の頃には文学全集出版が何回目かの全盛期を迎えていた。河出書房からは世界文学全集が毎月1冊ずつ刊行され（全48巻だったかな？）、3歳上の次姉が乏しい給料を割いてそれを購入していた。姉が手をつけるより先に毎月しっかり読ませていただいたものだ。私が無類の読書家だからというよりは、青春真っ盛りの姉は読書にまでなかなか手が廻らなかったためだろう。モーパッサン、スタンダール、トルストイ、ドストエフスキーなどなど、読んだという実績だけは残った。嫁入り道具候補のひとつ、平凡社世界大百科事典（全26巻？）も、これまた、まるで我が蔵書のように、東京の寮・下宿に運んで使わせてもらった。新婚世帯が狭かったせいもあるけど、姉上ごめんなさい。

浪人中は、高松高校補習科同級生のF君から、中央公論社発行「日本の歴史」を毎月配本のたびに借りて読んだ。さすがに、再受験間近には、ちと嫌な顔をしていたな。なんだから、人様の物にばかり手を出していたみたいだけど、NTTを経て今は関西大学教授のF君、感謝の気持ちは忘れていないからね。

大学時代は、日本近代文学の古典、推理小説の翻訳物、内外のSFなどごちゃごちゃ読んでいた。そこで、読み損ねた或るSFについて。大脳皮質は中枢神経系のなかでも最も高度な役割を持つところとされているが、下等な脊椎動物からすでに存在している部分と、高等になって初めて出現する部分（新皮質）とがある（デジタル版平凡社世界大百科事典より）。ところが、このSFでは、大脳新皮質は実は外来の寄生生物だというのである。そして、人間行動のすべては、この寄生生物の指示に基づき、彼の利益のためにあるという。

こう解釈すると、他の動物に比べて大きすぎる頭部、長い未成熟時代、他の動物には見られない大規模な同種間闘争、これらすべてが説明できるというのだ。最近この本を読みたくなくて、荒筋を紹介してくれた（はずの）K君に本の題名を尋ねたところ、全く身に覚えがないという。どなたかご存知ないでしょうか？

文庫本中心で、値が張る書物は殆ど持っていない。しかし、三島由紀夫「豊饒の海」4部作は、第1巻「春の雪」が残念ながら第8刷なのを除いて、「奔馬」、「暁の寺」、「天人五衰」は初版第1刷を手に入れることができた。

天人五衰巻末の3行は、

庭は夏の日ざかりの日を浴びてしんとしてゐる。・・・・・・・・

「豊饒の海」完

昭和四十五年十一月二十五日

となっている。いうまでもなく、三島自決の日付だ。この年私は大学院1年生で、昼食を終えた教授が、三島由紀夫が市ヶ谷の自衛隊に立てこもったというホットニュースを興奮気味に持ち帰ったのをありありと覚えている。

戦史物に興味を持ったのは11歳上の長兄の影響だ。戦闘描写ではなくて、明治以降の日本の戦いの軌跡を辿り、なぜ米国に無謀な戦いを挑み、そして完膚なきまでに叩きのめされたのか、そこに興味を持った。司馬遼太郎の「坂の上の雲」はこの長兄の蔵書だ。代わりに、チャーチルの「第2次世界大戦回顧録」（全6巻）は10年前から貸しっ放しだけど、催促しないからね。

サラリーマン時代は、出張の行き帰りが最高の読書タイムで、中でも、藤沢周平は新潮・文春・講談社3文庫60余冊を買い求める一番のお気に入りとなった。藤沢物語は深い読後満足感と5年もたつときれいサッパリ忘れてしまうという二つの長所を持つので、何度も楽しめてお得だ。もっとも、同じ本を二度買うというミスを何回も犯してしまったが。

詫間電波高専に奉職してそろそろ1年を迎える。図書館は隣の建物、しかも、研究用図書費まで頂いて、深く感謝している。最近本を読み始めるとすぐ眠くなるのでなかなか捗らないが、この機会に図書館を渉猟して新たな読書ジャンルを拓きたいと思っている。